４節　ソ連からロシアへ

ロシア（ロシア連邦）

ロシアの国土は桁外れで、ユーラシア大陸のほぼ１/３を占めている。東はベーリング海峡から西はバルト海までの 11,000 ㎞、北は北極圏から南はカフカス山脈南端までの約 4,500 ㎞、14 ヶ国と国境を接し、国土面積は日本の 45 倍である。これは地球上の居住地域の１/８を占め、世界最大の国である。人口は 14,482 万人（2024）、その 80%以上がスラブ民族のロシア人、その他はウクライナ人、チェチェン人などなどである。民族は 100 を超える多民族国家である。

ロシアを語るのは難しい。ロシア人が愛するウォッカを引用し、「シベリアでは３０㎞は距離ではない、―30℃は寒さではない、30℃は暑さではない、そして、アルコール 30 度は酒ではな

赤の広場（正面奥：聖ワシリイ大聖堂、右：クレムリン、左：デパート）

い」といわれ何もかも桁外れの国である。ロシアを横断するシベリア鉄道もまた同じで、モスコワヤロスラヴリ駅から日本海に面する港湾都市ウラジオストクを結んでいる。その長さは 9,300 ㎞でおよそ 146 時間、出発して７日目に到着する世界一長い鉄道である。国内の時差は 10 時間だが、11 の標準時をもち世界で最も多い。

ロシアは近くて遠い隣国だが、シベリア抑留や赤の広場の軍人による行進など、強面、高飛車、冷たい国の印象の半面、ロシア民謡となると胸の奥底が揺さぶられ、懐かしくすら感じられる。

ロシアを流れる河川を見ると、長さでは長江や黄河に及ばないが、流域面積では北極海に注ぐ３本の河川、オビ川、エニセイ川、レナ川と、オホーツク海に注ぐアムール川が、ユーラシアで１位から４位を占めている。

北極海に面した海岸平野地帯にはツンドラが分布している。ここから南に移動すると広大な針葉樹の茂るタイガ地帯である。シベリアを中心とする針葉樹林帯で、その範囲はウラル山脈からレナ川付近のヴェルホヤンスク山脈まで伸びており、シベリアの約 70%を占めている。

ソ連の気候は、緯度にほぼ平行に区分することが出来る。北から順に、寒帯のツンドラ気候、冷帯湿潤気候と冷帯冬季少雨気候、乾燥気候のステップ気候、沙漠気候の地域に分けられる。冷帯気候

の土壌は灰白色で強酸性のポドソル土である。タイガの夏の名物が蚊の大群で、雲のように出現し、人間や家畜を襲うという。

ソ連の成立と崩壊

専制君主、ブルジョアジーが支配する搾取社会でなく、労働者と農民が中心となり社会、民族の文化や生活が守られる自由と平等を実現する国家として生まれたのが「ソビエト社会主義共和国連邦」であった。1917 年、レーニンを指導者とする地球上初の社会主義国家の誕生であった。そして、スターリン、フルシチョフとブレジネフ時代を経て、ソ連崩壊のゴルバチョフ、エリツィンへと引き継がれてきた。

ソ連最高指導者のマトリョ-シカ（ハンガリーで購入）

ソ連は国土面積、農地面積ともに世界１だった。６億 ha の広大な耕地や牧草地では、2,000 万人から 2,500 万人の農民、農業労働者がコルホーズ、集団農場やソフホーズ、国営農場に属し、農業に従事していた。農業経営の目的は、国家計画に従って農産物調達目標を達成することで、農民の自主性は認められていなかった。農産物は国家によって買い上げられ、国家管理の下で価格が決まり全国に流通していた。ところが、60 年間に及ぶ集団農業は農民から生産意欲を奪い、農業の技術や知恵をも奪い取ってしまう結果になった。集団農場での生産性は停滞、後退、農産物の流通システムの不備によるロスも重なり、1970 年代初めから穀物輸入が始まり、80 年代には世界最大の穀物輸入国になってしまう。

ゴルバチョフは、1985 年に集団農場体制を解体し、個人農、家族請負制度を打ち出し、農業分野にも「市場経済」を導入することで農民の意欲と生産性向上を目指した。同時に政治経済の民主化、自由化の動きが活発化しペレストロイカ、改革やグラスノスチ、情報公開へと向かう。さらに、共産党の一党独裁から共和国への権限移譲により、各共和国の民族運動が激しくなり、ソ連崩壊へと向かっていく。

ソ連崩壊を決定づけたのが 1989 年、ベルリンの壁崩壊であった。社会主義のシンボルであったベルリンの壁崩壊は社会主義の崩壊を意味していた。遂に、1991/12、ソ連共産党解散を受け連邦を構成していた共和国が主権国家として独立した。そして、12/25 ソ連大統領ゴルバチョフの辞任に伴いソ連が解体した。国名を「ロシア連邦」と改め、民主的な立法議会の形成や経済改革を推し進めようとしているが、国内の政治不安や経済混乱しており前途は厳しい。

【資料】　スターリン時代

スターリン時代、大粛清の名の下で反対派の徹底的に殺害を行ったことが知られている。罪名は反革命罪、国家転覆罪、国家反逆罪で、一方的に死刑宣告を行い、判決即執行であった。1934 年の第 17 回党大会の代議員 1,966 人中 1,108 人が逮捕、銃殺された。また、1934 年の中央委員会メンバー139 人中 110 人が処刑あるいは自殺に追い込まれた。さらに、学者、軍人、官僚、農民などあらゆる分野での反対者の粛正（虐殺）を行った。ゴルバチョフ大統領時代、KGB（ソ連国家保安委員会）は 1930～1953 年のスターリン時代に 786,098 人が反革命罪で処刑されたことを公式に認めている。

ロシア連邦の国旗

ソ連は建国 70 年を迎えようとした 1991 年に崩壊し、15 の共和国はばらばらになった。翌年ロシア連邦が成立し、ソ連の後を継ぐ国として新しい一歩を踏み出した。それに伴い「鎌と槌の赤旗」から帝政ロシア時代の「三色旗」、白（高貴と率直の白ロシア人ーベラルーシ人）、青（名誉と純粋性の小ロシア人ーウクライナ人）、赤（愛と勇気の大ロシア人ー民族ロシア人）に戻った。

新生ロシアで長期にわたって政権を握るウラジーミル プーチン大統領は、独裁的との批判を余所に「強いロシア」の復活を目指した国造りを進めている。

＜ソ連崩壊後の市民生活＞

1991 年末、ソビエト社会主義共和国連邦が崩壊し、各共和国が主権を持った独立国家となった。ソ連の大部分を占めていたロシア共和国も独立国家「ロシア連邦」として歩み出した。社会主義時代には、パンなどの基礎的食料品は国営商店で極めて安い値段で売られていたが、ロシアは市場経済への移行を目指し、需要と供給の関係で価格を決める価格自由化で物価が一気に高騰した。

モスコワの目抜き通りアルバート街の国営商店で、価格自由化以前と化後 3 週間の価格を比較すると、牛肉が7ルーブルから 105 ルーブルと 15 倍、豚肉が 16 倍、オレンジが 1.8 倍、チーズが 17 倍と物凄い上昇となったという。1992 年の年金収入は夫婦で毎月 750 ルーブル、生活困窮者が続出し、モスコワでは繁華街の地下通路や地下鉄で物乞いする年寄りや障害者の姿、年金生活者は家にあるものを売りその日をしのぐ生活、戦後間もない頃、日本でも見られたタケノコ生活が見られたと聞く。

パロティーで小銭稼ぎ

ロシアビヨンドによると、ロシアの年金額には地域差があり、モスクワが最も高く 9046 ルーブル（約 12,400 円）、全国平均は 7476 ルーブル（約 10,240 円）（2015 年）とあった。物価が高くないとはいえ生活は容易ではない。2011 年、モスクワ市内で物乞いする年寄りやパロティーで小銭稼ぎする姿を見かけた。

極東と日本の関係

日本にとってロシアは隣国である。極東連邦管区の沿海地方州都、ウラジオストクは成田から直行便で２：30 の距離である。ウラジオストク、ハバロフスクやサハリン州は、北海道との深い交流の歴史がある。

極東連邦管区はバイカル湖から太平洋に接する地域で、ロシア連邦面積の 36%、人口は 644 万人で 4.5%、国内総生産（ＧＤＰ）4.7%（2010）である。ソ連崩壊後は中央政府からの予算配分激減により、工業生産の大幅な減少で経済不振が続いている。しかし、

日本、中国や韓国などの対アジア関係の拠点に変わりなく、プーチン政権の最重要政策課題の一つに極東、シベリア開発をあげている。

極東･東シベリアの地下資源

ソ連時代のシベリアはエネルギー資源の 3/4、木材や水力発電の半分を占めており資源の宝庫といわれていた。ソ連政府はこのシベリアの豊かな資源開発に着手し、第二次世界大戦後は東シベリアの開発を進めた。最近、注目されているのがサハリン沖の石油と天然ガス開発である。日本も参加し本格的な調査が既に始まっている。

2011 年、サハリン － ハバロフスク － ウラジオストクを結ぶ天然ガスパイプラインが完成した。近い将来、ウラジオストクを拠点に日本、中国、韓国などアジア太平洋地域への輸出を目指している。この計画が順調に進めば、地下資源の輸出による経済の建て直し図ろうとするロシア政府の資本主義化路線に貢献するのではといわれている。

さらに、サハリン沖の天然ガスに加えてコンデンセート、天然ガソリンを使って、大規模な石油化学コンビナートの建設が決まり、日本の石油化学企業の参加も決まっている。このように今後、日本とロシアの経済関係はますます密接になっていく可能性が高い。

北方領土問題

日本は 4 つの領土問題 (*) を抱えている。なかでも日本が返還を強く求めているのが、ロシアが実効支配している択捉島、国後島、色丹島と歯舞諸島、すなわち北方領土問題である。ところで、先の第二次世界大戦のうちアジア太平洋地域が戦場となった日本と連合国との太平洋戦争の終戦記念日は､1945 年８月 15 日と日本人は理解している｡しかし､国際法上での戦争終結は 1945/9/2、東京湾に浮かぶミズリー号で日本が降伏文書に調印した日となっている。この 8/15 と 9/2 の終戦日のずれが、北方問題の大きな原因となっている。

この 2 週間余りの間にソ連は千島列島の島々を次々に占領し、降伏文書調印後の 9/5 までに北方領土全てを一方的にソ連に編入してしまった。少し詳しく見てみると、国後島と択捉島は戦争で勝ち取ったものだが、歯舞諸島と色丹島は降伏文書に調印した 9/2 の後、4 日まで攻撃して占領しているので国際法上は不法占拠になってしまう。

1945 年、日本は太平洋戦争に負け、1951 年「サンフランシスコ講和条約」で連合国と平和条約を結んだ。ところが、ソ連はアメリカを中心とする西側諸国との対立、いわゆる冷戦でこの講和条約に参加していない。それで、日本は未だにソ連、今日のロシアとは平和条約を結んでいない。従て、国境も確定していないのである。

1956 年､鳩山一郎総理とフルシチョフ第一書記との会談をもち､「日ソ共同宣言」で国交は回復したが、平和条約は未締結のままである。しかし、この時フルシチョフは平和条約締結後に歯舞諸島と色丹島の返還を約束した。ところが、1960 年、岸信介総理により「日米安全保障条約」の改定がなされた。これに対してソ連は東西冷戦の最中ということもあり、態度を硬化させ 2 島返還の約束は反故となり今日に至

っている。

（＊）日本の領土問題

北方領土問題の他に、「竹島問題」　日本海の島嶼群で、日本政府は 1905 年に島根県に編入。日本では竹島で、韓国では独島、第三国は中立的な立場からリアンクール岩礁と呼んでいる

「尖閣諸島問題」　東シナ海にある島嶼群で、日本では尖閣諸島、中国は魚釣群島。1886 年代から 1940 年にかけて日本人が船着場や鰹節工場を造ったが、その後は無人島。日本が実効支配しており、2012 年に私有地から国有化した

「沖ノ鳥島問題」　太平洋のフィリピン海に位置し、小笠原諸島に属するので東京都小笠原村。島か岩で領海、排他的経済水域が大きく違ってくる

＜シベリア＞

ロシアは世界で最も大きい国である。その国土は、北極圏を中心に広がる寒帯、永久凍土のツンドラから、亜寒（冷）帯のタイガ、乾燥帯のステップと沙漠、コーカサスやカムチャッカの山岳地帯と多種多様である。

ロシアの半分以上を占めているのが「湿原」の意味をもつシベリアで、その大部分がタイガに覆い尽くされている。その様子は、「何処まで続くかは渡り鳥しか知らない」と、ロシアのある作家に言わしめたほどである。タイガとは、ロシア語で「北方の原生林」を意味している。針葉樹のカラマツ、トウヒ、モミ、マツなどが中心だが、南にくるとシラカバ、ポプラなども混じり合ってくる。ここはトラやクマなどの大型獣からオオカミ、キツネ、テン、ミンク、リスなどの毛皮獣の住処であり、長年毛皮の供給地であり、開拓のための囚人の流刑地でもあった。

ところが、鉄道建設がシベリアを大きく変えた。１家族につき 56.5ha の土地が無償で与え、そのうえ、一定期間兵役と税金を免除という契約に惹かれて何百万ともいわれる農民たちがシベリアに押し寄せた。さらにその後の移民により、シベリアの人口 3,000 万人のうちブリヤート人、ヤクート人などシベリア先住諸民族は 100 万人といわれ、その割合はたった 3.3%に過ぎなくなった。また、第二次世界大戦中、ソ連はナチスの攻撃から工業を守るため、いくつもの工場がウラル山脈を越えて安全なシベリアに移動した。それを可能にしたのはいうまでもなくシベリア鉄道であった。

長年、眠れる大地といわれたシベリアは、石炭、石油、天然ガス、鉄鉱石はじめ、ニッケル、マ

生後数か月のマンモスのミイラとマンモスの骨格（サンクトペテルブルグ動物学博物館）

ンガン、コバルトなどエレクトロニクス、航空宇宙、原子力など先端科学技術で多用される希少金

属、レアメタルなど多くの天然資源を産出し、今日ではロシア工業の中枢を担っている。さらにシベリアには膨大な水資源がある。バイカル湖から流れ出ているアンガラ川、エニセイ川支流にあるブラーツク発電所一つで、アメリカ合衆国テネシー川流域開発公社、ＴＶＡが建設した 45 のダム全部の発電量よりも多い。

シベリアでは、森林すなわちタイガの伐採が盛んに行われ、ここ 30 年間で日本の面積の３倍近くに達したと報じられた。タイガの低温な土壌には、腐植土や泥炭が多く、メタンガスが閉じ込められている。伐採で直射日光を受けるようになった永久凍土が融けだし、自然界に放出されるという。このメタンガスは、地球の温暖化の元凶とされる二酸化炭素に比べものにならない温室効果があり、温暖化を後押ししているとも言われている。

かつてのシベリアは、罪の宣告を受けたロシア人にとって恐怖と絶望の地であったが、今日では厳しい自然ながらも豊かな資源に恵まれた明るい未来の地に変貌した。また、数万年前に絶滅したマンモスが生前と同じ姿で発見されるなど、神秘的で未知への夢を抱かせるロマンの地でもある。

＜シベリア鉄道＞

空の時代になっても色褪せることなく夢を育むのがシベリア鉄道である。しかし、その建設宣言した時は、多くの人々は荒唐無稽なものと受け止めたという。建設が始まっても、手始めがタイガの伐採、ツンドラに振り下ろすツルハシやシャベルは、ゴムを叩くようにはね返され、1 日中戸外で働けるのは年間 120 日程、雪融けになると洪水の頻発と諸々の悪条件が重なった難工事だった

シベリア鉄道の本線　モスクワ～ウラジオストク間の主な通過駅

ことが記録されている。別の見方をすれば、それほどまでに必要に迫られていた鉄道だったともいえる。旧ソ連の経済停滞を反映して、シベリア鉄道はここ 10 年来、輸送量が減少の一途を辿ってきた。しかし、最近になって変化が見え始めた。日本のソニーが東ヨーロッパ向け輸出のほぼ 100%、シベリア鉄道を利用しているし、ホンダもヨーロッパ向け自動車部品の輸送の一部を海上ルートからシベリア鉄道に切替え始めた。輸送規模は、金額で 89 年の 40 億円から、90 年は 80 億円と倍増したという。

シベリア鉄道は、EU 市場と日本を結ぶ架け橋になろうとしている。シベリア鉄道を使った場合、日本とヨーロッパ間の輸送距離は 13,000 ㎞で 18～20 日、スエズ運河経由の海上ルートだと 45 日で、距離も約 8,000 ㎞も短い。

軌間は5ft、1520mm（新幹線 1435mm）

世界の生産拠点である日本から輸出される製品をシベリア鉄道が引き受け、ヨーロッパの中心部へ送り出す大動脈の地位を確立すれば、ロシアに外貨が確実に入ることにもなるのだが、レールと枕木の老朽化などメンテナンスの必要に迫られているという。速度は時速 60～140 ㎞といわれているが、単純に距離を所要時間から求めると 63.7 ㎞/ｈである。座席種類は特等寝台から１等寝台、利用した２等寝台、３等寝台、座席の５段階に区別されていた。

ところで、シベリア鉄道といっても本線のモスコワ～ウラジオストクの外に、バイカル湖の北を通る第２シベリア鉄道の「バム鉄道」、ウランバートル経由のモスクワと北京を結ぶモンゴル縦貫鉄道、通称「裏シベリア鉄道」、更には中国北東部（旧満州）経由して北京に至る「東清鉄道」も広い意味でシベリア鉄道である。

＜暖房は石炭ストーブ＞

シベリア鉄道で乗り降りする時、決まって石炭を燃やす懐かしい臭いが鼻をついた。停車中、乗車口横に石炭ストーブが備え付けられているのを目撃した。全て電化されている鉄道で石炭ストーブを使用する理由は、－５０℃にもなるシベリアの寒さであることを知った。車内の暖房を電気に頼っていたとして、事故で立ち往生して電気の供給が切れてしまったら、寒いだけでは済まされない、乗客の命にかかわる危険にさらされるからだという。

石炭ストーブ真後の車内にあるのが給湯器サモワールで、熱々のお湯が 24 時間使用可能であった。車輌廊下の突当り、車掌室の前にある古めかしいサモワールは茶、スープ、インスタント麺と大活躍で、何度も足を運び、その都度ほっとする場所だった。また、車掌さんにチャイ、紅茶を頼めば、金具の取手のついたガラスのコップで 25 ルーブル、80 円弱で運んできてくれる。コップは下車するまで利用できるので便利だった。

石炭ストーブと車内の給湯器

各車輌に詰めている 2 名の車掌さんたち専用のコンパートメントがあった。時々ご飯を炊く香りが廊下に漂っていた。車中では私服だが、停車駅では帽子にコート姿に早代わりし、乗降者用デッキを整え、直立不動に近い姿勢で応対してくれる。見かけた車掌さんは全て女性だった。

車掌さんの仕事領域はかなり広い。乗車券のチェックに始まりシーツ類の配付と使用後の取りまとめ、停車駅に着くとデッキから降りるための足場づくり、廊下や乗降車口手摺拭き、乗降者の確認と手助け。他にも各コンパートメント

や廊下の清掃、トイレ清掃、サモワールの管理、到着駅でのゴミだし、チャイや物品販売などなど、目撃した範囲での仕事内容だ。結構忙しく、大変な仕事に見えた。

＜悪しき伝統＞

シベリア鉄道の食堂車は至ってシンプルだった。ウェイトレスは一見ぶっきらぼうに見えるが、デッキで喫煙中の「ちょっと待ってくれ！」 の仕草と表情は、茶目っ気に加え、優しそうな笑顔であった。気になったのは、食堂車内客席の一角にでんと腰を降ろしっぱなしで不愛想で、横に進化を遂げた小母さんがいた。お金の出し入れ以外の仕事は一切無視。サービス精神などまるでなし。つり銭の小銭不足から２度も商品で返されたが、商品を返すと小銭が無いのだからしょうがないと怒られる始末だった。

食堂車のメニューはスープ、メーンデッシュとサラダと余り変化はなかった。食堂車のサラダ、真っ赤に熟したトマト、キュウリ、タマネギにオリーブオイルのドレッシングとロシアのハーブであるディルをかけたものが美味しかった。時折り雪の降るシベリアで、夏を代表するトマトとキューリが惜しげもなく出てくるのが不思議だった。何年か前、冬のラップランドで食べた輸入トマトとピーマンが青臭いだけの同じ味、歯ざわりだったことを想い出した。地中海沿岸からの輸入かと聞いたら、南ロシアでいくらでも栽培できるとの答えが返ってきた。ロシアの広さをすっかり忘れていた。

食事を終えた隣席のオーストラリア人がコーラを注文した。250、500 ㎖などの小中ボトルはないと 1.5ℓのボトルがドーンと出てきた。苦笑いしながらボトルを抱えた彼女の表情は「いくら大雑把なロシアでも…」と訴えているように見えた。

＜心暖かいロシア人＞

ウラジオストクからのシベリア鉄道と、北京発モンゴル経由の裏シベリア鉄道が合流するウランウデで下車し、車でバイカル湖に向かった。９月中旬だというのに 1,135mの峠は雪に覆われていた。バイカル湖岸トプカ村のゲストハウスに入った時、バイカル湖は夕陽で真っ赤に染まっていた。

初日の夜、ゲストハウスのお母さんから「洗濯物を出しなさい」の声がかかった。翌朝、外に干した洗濯物は白く凍りついていた。２日目も日没と共に気温はぐんぐんと下がり始めた。お父さんの「サウナの準備が…」の声に、一斉に反応した。汗が吹き出てきた頃、白樺の小枝を束ねたヴィヒダの使い方の説明があった。ヴィヒダを水に浸して横になった人の背腹を満遍なく叩き、顔の時は香を吸い込む。こうすることによって血行を良くし、邪気を祓い、精神的に落ち着きをもたらすのだという。高温多湿の中でのこの作業は、思ったよりも応える作業だった。オーナー家族共々老若男女がわいわいがやがやとの作業は、仲間意識の高まりにはかなりの効果があった。

バイカル湖を染める夕日

最終日の夕食後、バイカル湖だけで捕れるオームリが串刺しならぬ剣刺しのバーベキューを楽しんだ。受け皿、ナイフ、フォークはなく、各自の前に剣を差し立て、手で肉を削ぎながら食べるシベリアの地に相応しい何とも野趣に富む食べ方だった。

本来、ロシア人は人懐こく、おしゃべり好きで開放的だと聞いたことがある。感情的で情緒的でもあるという。３泊お世話になったゲストハウスを後にする時、あれもこれもと食べ物を詰め込んだ段ボール箱を渡された。お世話になった民宿の家族は、人懐こく、お人好しで、良い意味での世話好きな田舎人という感じだった。シベリアという厳しい自然環境が、みんな寄り添って生きる知恵を無言で教えてくれていた。

バイカル式バーベキュー（右：ツァーリーダー）

副食は毎回３品　魚の一品（右下：マッシュポテト）

ゲストハウスからの食べもののお土産

＜バイカル湖＞

９月中旬だというのにバイカル湖岸の砂浜は、霜で白くなっていた。湖面には青空に浮かんだ白い雲が映り、小さな波に洗われる小石は朝の陽を照り返していた。記念にと小石を拾い集めた。これが意外と楽しい。赤、茶、白、緑と拾い始めてみると夢中になってしまう。

シベリアの人々は「バイカルを見ないで、ロシアを見たとは言えない」という。ゲストハウスオーナーの案内で湖岸のビューポイント３カ所を中心にゆっくりと回った。湖岸に松の木が、湖面から動物と似た岩が現れ、神秘的な湖が急に身近なものに感じられるひと時でもあった。

バイカル湖の幅は平均 48 ㎞、三日月形の湖面の周囲 636 ㎞、湖面の面積は琵琶湖の 45 倍だが、世界では８番目である。ところが、水深 1,642m は世界最深で、その貯水量は、バイカル湖の８倍近い面積である北米大陸の五大湖とほぼ同じだというから驚きである。「自然の湖」の意味を持つバイカル湖は深く、しかも急に深くなること、比較的単調な湖岸線などの特徴を持つ。これらは全てバイカル湖の生い立ちによるものだという。すなわち、２つの断層の間が帯状に沈降し、同時に湖の両側の山地が隆起して巨大な窪地、地溝がバイカル湖になった。この地溝を造った地殻運動は 2,000 万年以上前から始まった。19 世紀以来ここで記録された大規模な地震が 30 回を越えるというから、地殻運動は現在も続いているといえる。湖岸から少し離れたところに温泉が湧き出て

いた。足湯には熱過ぎたから４５℃位はあったろうか。

「シベリアの真珠」　透明度、深度、古さ、貯水量共に世界１

バイカル湖は、北緯 53 度の寒冷地にもかかわらず多種多様な動植物で知られている。なかでも、チョウザメ、サケ科のオームリ、バイカルアザラシなど 1,334 種が確認されている。その 70%が固有種だという。その一つであるバイカルアザラシとのご対面を楽しみにしていたが、この地域では無理ということで断念せざるを得なかった。

車掌のネームタグにもバイカル湖

【トッピクス】

＊バイカル湖横断

鶴岡市在住のネーチャー スイマー、五十嵐 憲 氏が 2004/8、バイカル湖南部のスレブニュー岬から対岸までの 30 ㎞を、水温 10℃以下の条件下で、世界で初めて泳いで横断した。他にドーバー海峡横断、間宮海峡横断、宗谷海峡横断などの記録を持つ

＊バイカル湖アイスウォーク（氷結したバイカル湖徒歩横断）

バイカル湖中北部のリストビヤン村から日本人グループが、中南部対岸のタンホイ村からロシア人グループがスタートし、中間地点で合流し氷上でテント泊ツァーを JTB ツァーズ新潟三条支店が 2005/3 に企画実施

＜イルクーツク＞

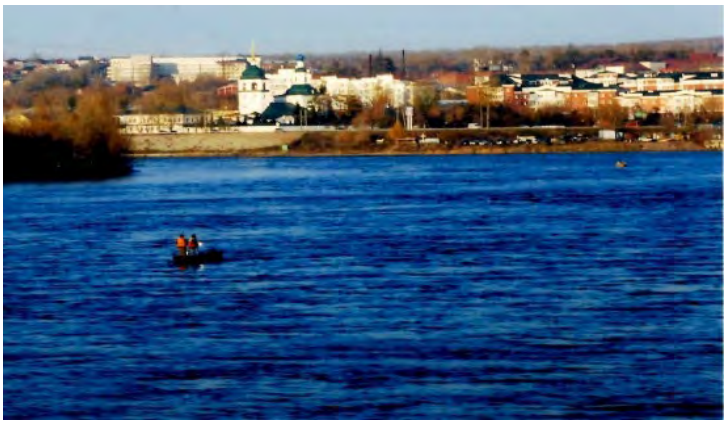
バイカル湖岸の民宿でロシア人の人情、暖かさの余韻に浸りながらウランウデからシベリア鉄道でイルクーツク入りした。所要時間 7 時間のうち半分以上がバイカル湖に沿って走った。湖面を背景に民家がちらほら見える。放し飼いの馬や羊が草を食み、子どもたちの姿も見える長閑な眺めであった。しかし、バイカル湖の南を迂回する 260 ㎞の間は、硬い岩山を削り、多くの鉄橋造りを強いられるなど困難を極めたところで知られている。

イルクーツク手前の駅に列車が滑り込んだ時、ホームがなんとなく慌ただ

しくなった。短い停車時間にもかかわらずバイカル湖特産のオームリの燻製を売りに来ていた。動き出した列車内にたちまち燻製特有の香りが充満した。

イルクーツクはシベリア鉄道のほぼ中間、東シベリアの政治、経済、文化の中心地である。乗り換え待ち時間を利用してバスで市街地に出た。駅のすぐ前をバイカル湖から流れ出す唯一の河川、アンガラ川が流れており、市街地を二分していた。左岸の工業地帯がアンガラ バイカルコンビナート、右岸はキーロフ広場を取り囲むように教会、大学、州政府関係の建物が連なっていた。レンガ造り重厚なもの、カラフルな壁、彫刻の施された窓やバルコニーの手すりなど美しい建物で、ヨーロッパを彷彿させる景観だった。広場中央に噴水があり、先の戦争の英雄を偲ぶ「永遠の火」が灯されていた。

永遠の火



アンガラ川での魚とり

＜ウラル山脈越え＞

イルクーツクからウラル山脈を越えたクングールまでの３泊４日の旅が始まった。シベリア鉄道はモスクワタイムで運行されている。イルクーツク発 19：00 だが、モスクワタイムでは-5 時間である。ツァー中、列車内の食事は各自調達である。車内ではいつでも熱湯が用意されていると事前に説明があった。乗車前、各自が思い思いのものを買い込んだ。自分はビスケットとナッツ、紅茶のティーバック、インスタントのスープ。他はホームに売りに来るおばちゃんたちの食料、茹でジャガイモ、茸とジャガイモの煮込み、停車駅のキオスクと食堂車を利用した。シベリア鉄道には、シャワー室が付いていることを知り、物珍しさもあり利用した。300 円弱で、広い更衣室にはソファーがあり、清潔なうえ、湯量も豊富でなかなか快適だった。

乗車３日目、シベリア鉄道主要駅の１つであるオムスクを過ぎた頃から白樺林が続いている。緯度の変化が関係しているのかと思い地図を広げてみたが、余り変化はなかった。想い出したように現れる民家は、自然界に間借りしたかのようなシベリア式丸太造り家屋、イズバで大地に這いつくばり、溶け込んでいる。時々現れる畑は大地の彼方まで続いていた。

15:00 過ぎ、ウラル山脈東麓に近いチュメニに着いた。シベリア鉄道開通以前は、シベリアへの門戸であったが、20 世紀半ばにガス田に続いて油田が発見され、埋蔵量、産油量ともロシア最大で知られている。油井などは見えなかったが、駅構内には端が見えないほどの長いオイルタンク車が停車していた。

次の停車駅はエカテリンブルグで、ここを過ぎると間もなく線路の南側にアジアとヨーロッパを分けるオベリスクが見えるのだという。乗客にとっては一大イベントだが、われわれの列車の出発

時間が 21:21 時だから、暗闇の中通り過ぎてしまった。

＜クングール＞

シベリア中央部を代表する都市、イルクーツクから３泊４日、列車は現地時間４：20、雨のクングールに着いた。９：00 になっても雨は降り続いていた。ホテル３階から眺めると、白樺の原生林が街を取り囲んでいた。ウラル山脈西側、ペルミの近くでシベリア鉄道沿いにあるローカル色豊かな街がクングールであった。日本で用意した資料には、地名だけで何の説明もなかった。一通

琥珀色のネコ

白樺皮細工の小物入れ

り街を歩いた後、地元の人たちが作って販売しているショッピングセンターに入った。大小様々なお土産物や製品が溢れんばかりに並んでいた。なかでも琥珀コーナーの照明が一段と明るく輝いていた。２階は民族調の家具、照明器具、絵画、工芸品などが展示されていた。琥珀色の石でできたおどけた表情のネコの置物と白樺皮細工の小物入れの素朴さが気に入り買い求めた。

タクシーを拾い、郊外のアイスケーブ、氷の洞窟にむかった。着いたところは、チェンソーアートの巨大な動物や人間などの木彫りが配置された森林公園であった。草木に覆われた丘陵内部に入った。二重扉の中は０℃以下ということだが、風が無いので寒さを感じなかった。説明によると19世紀から珍しいところとして知られていたという。素掘りの通路を 20m ばかり進むと、内部

アイスケーブ内の氷華

が急に広くなった。洞窟は長さ６㎞と大きいが、公開されているのは 1.5 ㎞だという。天井から粘性の氷が流れてきたように直径 7～8mの氷柱が現れた。鍾乳石や石筍のように
何本もの氷柱が上から、下からは氷筍が伸びており、まるで巨大な肉食恐竜の口内であった。霜がくっつきあった巨大な氷華は、照明を背にすると複雑に屈折し、不思議な色合いで輝いていた。氷の他に、地下湖、大昔のサンゴ礁などがあった。洞窟の成因は鍾乳洞ということだが、鍾乳石も石筍も見当たらず、花崗岩がごろごろしていた。

アイスケーブの帰路、旦那さんが菓子の木型、マトリョーシカ、照明器具作りやシルク生地の絵柄染めなどをしている家庭を訪ねた。奥さんの手ほどきで、子どもさん２人も加わりジンジャーパ

ン焼きをさせてもらった。自分の干支に合った木型を選んだ。油を塗った上に生地を薄くのばし、ジャムを入れ、薄く生地で覆って取り出し、オーブンで 20 分ほど焼くと出来上がる。旅先の家庭で一緒に過ごした時間は、ソ連時代に培われた強面、高飛車、冷たい国の印象を大きく変えてくれた。

寅年に相応しいパンが焼けた

＜モスクワ近し＞

モスクワが近づくにつれて、白樺林の中に畑が多くなってきた。通り過ぎるローカル駅舎も様変わりし、人影が多くなり、教会が目立ってきた。いつしか白樺林は姿を消し、代ってコンクートの建物が目立ち始めた。うとうとし始めたときだった。コンパートメントの扉が開いた。物売りの小母さんだった。中に入ってこないが次から次へとやってきた。手織りのセーター、カーデガン、カシミヤのショールから宝石、食器、コップ、おもちゃ売りと続いた。

そして、明らかに興奮気味の旅人がいた。オーストラリアの若者が「モスクワだ！」と声を上げた。中国からはるばると丘を越え、沙漠を越え、タイガの中を突き抜けてきたことへの感傷というより、心の奥底に眠っているかつてのソ連時代、東西冷戦時代、反体制側の中心ということの方が大きいように思えた。ペキンからモンゴル、ウランバートル経由で 7,898 ㎞、車内 6 泊 10 日の「裏シベリア鉄道」の旅が終わった。モスクワ ヤロスラヴリ駅着 10：08。地下鉄に向かう駅構内は、自分のペースでは歩けないほどの混みようだった。プラットフォームは人々で埋まり、地下鉄の鉄製ドアは人の乗り降りとは関係なく重々しい音を立て荒っぽく開閉していた。

【参考】

オーストラリア本社の INTREPID Travel のツァー　Trans-Mongolian Express（北京集合 サンクトペテルブルグ解散）に 2011/9 参加。参加者：ツァーリーダーはロシア人、オーストラリア人３名、ニュージーランド人２名、日本人１名　計７名

旅程：北京（2 泊）→列車（1 泊）→ウランバートル（3 泊）→列車（1 泊）→ウラン ウデ（1 泊）、イカル湖（3 泊）→列車（イルクーツク乗換）（3 泊）→クングール（1 泊）→列車（1 泊）→モスクワ（3 泊）→列車（1 泊）→サンクトペテルブルグ（3 泊）

＜モスクワの地下鉄＞

計６回利用した地下鉄は、モスクワの名所の１つだった。改札口を通ると直ぐに長いながいエスカレーターが待っている。核シェルターを前提に造られたと聞いたが、終点が見えない地下深く入って行く。しかも速い。日本の倍とはいわないがとにかく速い。それに、途中で乗り換えることもなく３分、４分は当り前である。貧血や荷物に引っかかって転倒でもしたら、途中で止まるような勾配ではない。やっとエスカレーターの階段が沈みだし、水平になってホームへと送り出される。そこは広々とした明るいホールで赤御影石のフロアー、天井にはシャンデリア、側壁は大理石で見事なレリーフあるいは彫刻で飾られた美術館であった。

モスクワの地下鉄は、国家的事業として進められてきたものを、スターリン政権下で「社会主義

のショーウィンドウ」、「労働者の宮殿」として定義づけ、駅内装用の石材を国内各地から集め、華美な装飾に彩られたと聞く。地上にそそり立つスターリン クラシック様式の地下版が地下鉄の駅だった。

【参考】スターリン クラシック様式

スターリンがニューヨークの摩天楼に対抗し、モスクワに多くの高層ビルを建て、ニューヨークのマンハッタンならぬモスクワのマンハッタンを目論んでいたとされている。今はアパートとして利用されているとのことだった

＜赤の広場＞

「赤の広場」を目指してオリエンテーションウォークにでた。北アルバット通りを西進し、アルクサンドロフスキー公園に出てマネージ広場へ。そして、ヴァスクレセンスキー門を通ると遥か彼方に色鮮やかなネギ坊主のドームをもつ聖ワシリイ大聖堂が望まれた。雨模様で遠方が霞んでいるが、中国の天安門広場より狭い印象だった。

赤の広場を目一杯カメラに収めようと石畳に膝をついて構えた時、「ここはソ連だ！」と心でつぶやいた。ロシアではなくソ連だったのは、物々しく武装した軍事パレードや革命記念式典の様子がテレビに大々的に映し出された映像が、脳裏に強くインプットされていたからだろう。今日では多くの観光客に混じって着飾った何組かの新婚さんが記念撮影する姿があった。軍人の姿もちらほら見られた。どうも頭の中と目前にある光景の時間の軸がずれていた。でも、あれもこれも紛れもなく「赤の広場」である。オリエンテーションウォークはここで終了、解散である。

３階建てのグム デパート外観と内部

赤の城壁に囲まれ隔絶されたクレムリンとデパートが、赤の広場を挟んで向き合っているのが不思議に思えてきた。広場の始まりがクレムリンの外に設けられた市場だったことと関係があるという。全長 200m あるのだろうか。ゴシック様式の重厚な建物は、外から見る限りデパートには見えない。内部は吹き抜けになった通路の天井はガラス張り、太陽光が世界のブランド品の数々を明るく照らし、カフェが通路にまで出店し、通路の広場では様々な催しが行われていた。このお洒落な空間もまたロシアである。

＜モスクワ寸描＞

● 駐車

モスクワの街は路上駐車の車で溢れていた。企業の駐車場は殆どなく、有っても狭く、路上駐車

して出勤せざるを得ないのだという。行政側で駐車場整備計画の話はでるが一向に進んでいないという。路上駐車はやりたい放題の感があった。自分の都合のいいように駐車するから、それぞれが車を出しにくくなる。歩道は勿論で交差点の中央部に駐車している車もあった。路上駐車のため片側２車線でも１車線になってしまい大変な混み合うであった。加えて、完全な車優先社会で、道路横断中に運転手から文句を言われることがしばしばあった。これらを反映してかモスクワ市内の渋滞時間は 2.5 時間/日（2016）、ロシアの交通事故死亡率は 19.20/人口 10 万人（2017）で世界 1 である。（日本は 3.10 で世界 36 位）

● 喫煙

レストラン、カフェなどで完全禁煙のところはないように思えた。禁煙、喫煙の席を分けているところはあったが、多くはどの席でも喫煙自由であった。また、どんな道路でも歩行喫煙を良く見かけた。朝の通勤時、歩きながら煙草を吸っている人の半数以上は女性だった。吸殻は当然路上にポイ捨てである。

世界保健機関（WHO）によると、ロシアの喫煙率は世界トップクラスで、18 歳未満は法律で禁じられているが、15 歳の 12%が毎日タバコを吸うという結果がでているという。（2013 年受動喫煙防止法が施行。屋内公共施設での喫煙禁止となった）

● イクラの缶詰

赤の広場からホテルに戻る途中、半地下の小奇麗なスーパーマーケットがあった。バイカル湖畔の民宿でいただいたイクラは、ぷりぷりしていて、味が濃厚だったのを想い出した。美味そうなパッケージのサケイクラの缶詰を買い求めた。イクラの語源はロシア語で魚卵、小さくて粒々したものを意味する。サケに限らず魚卵であればタラコでも、キャビアでもイクラである。サケの卵は「赤いイクラ」で、「黒いイクラ」はキャビアを意味していることを知った。

帰国して半年ほど経ってからほかほかの白飯にかけて、ロシア風にパンにサワークリームを塗りその上にのせて食べるのを楽しみにして缶を開けた。生臭みが鼻を突き、期待していたとろっとしたものからは程遠く一塊の状態だった。以前、樺太慰霊墓参にコックとして参加された稚内の方からカニ缶をいただいた時も生臭さが鼻を突いたことを想い出した。

● 大統領と民衆

赤の広場から北アルバット通りまで来たときだった。街にはただならぬ雰囲気が漂っていた。大通りのいたるところに警察官が立っており、車に埋め尽くされているはずの道路には一台の車も走っていない。車道両脇の歩道には人の波ができていた。学生風の若者に聞くと、大統領を乗せた車が来るらしいという。突然、けたたましいサイレンが聞えてきた。大型で見るからに頑丈そうな黒い車が、１台の車の前後左右を囲み、5 台の集団となって猛烈なスピードで通り過ぎていった。たちまち人垣が崩れ、車道は車にあふれ出した。30 年ほど前、シリア ダマスカスでも同じ光景を目撃したことを想い出した。大統領ともなると民衆というか国民と、こうもかけ離れた存在にならざるを得ないのだろうか。それとも独裁者の護身術なのだろうか。

＜クレムリン＞

ローカルガイドの後についてクレムリンに入った。モスクワ川北岸の小高い丘のクレムリンは、多くの城門と大小の塔を持ち、赤い城壁に囲まれていた。帝政時代の宮殿、聖堂などが建ち並んで

おり、世界遺産に指定されているが物々しく近寄り難い雰囲気である。

かつての武器庫は歴史博物館となっていた。ロシア皇帝の金銀やダイヤモンドなど宝物が展示されていた。ロシア帝国の国教儀式が執り行われたウスペンスキー大聖堂は、金色に輝くドームで飾られ、広場を挟んで隣には、これまた金色のドームが輝くイワン４世の鐘楼があった。その裏手にロマノフ王朝の面々が彫られた巨大な鐘、「鐘の皇帝」が台座に置かれていた。鐘の反対側に、これまた大きな大砲、「大砲の王様」 が鎮座していた。大砲前の砲弾は、重さが１ｔもあるとか。鐘の皇帝と大砲の王様、大きいもの、現実的でないものに勢力を注ぐ目的は何だろうか。

先年訪れた中国、天安門広場の東西 500m、南北 900m の広さは、高さ 34m という大きな天安門の本当の大きさを隠してしまっていた。西側に建つ人民大会堂正面に、直径 1m、高さ 25m の大理石の柱が 12 本立並んでいる。白柱の脇を行き交う人影がなければ、単に高いとか太いの表現で終ってしまう。

これら常識を遥かに超えたものは衝撃であり、畏怖の念すら抱かせてしまう。そして、造った君主なり政府を崇め、反抗心を萎えさせ、諦めさせる効果を期待しているのだろうか。何かもやもやしたものを感じながらクレムリン内を一周し、トロイツカヤ塔から外に出た。振り返るとソ連共産党の中枢が置かれ、現在もロシア連邦の大統領府、大統領官邸があるクレムリンが聳えていた。

説明の仕方に誠意が感じられたローカルガイドにお礼を述べた時だった。先の（3/11’11）大震災、津波そして原発事故以来、初めての日本人だという。そして、「フクシマに近いところから来た日本人の笑顔に安心した」と言葉をかけられた。これら自然災害や事故は、決して日本だけの出来事、事故でないことを改めて知らされた。同時に、ロシア人の心優しい一面を表わした一言にも感じられた。

【資料】 25 年の教訓を生かせ 「チェルノブイリ」

福島第１原発事故が収束しない中で、1986 年４月 26 日に旧ソ連（現ウクライナ）チェルノブイリで起きた世界最大の原発事故から間もなく 25 年を迎える。今も放射能汚染で周囲 30 ㎞は居住禁止区域のまま。被爆が原因と見られる子供の甲状腺ガンなど、周辺住民の健康被害も続いている。日本も過去の悲劇から目をそむけず、謙虚に教訓を学ぶ姿勢が求められる。無論二つの事故を単純に比較することはできない。チェルノブイリでは原子炉自体の爆発と火災で

大量の放射能物質が大気中にまき散らされた。福島では原子炉を覆う格納容器から放射能物質が漏れたが、原子炉が破壊されたわけではない。大気中の汚染レベルも 10 分の 1 以下とされる。旧ソ連政権は原発職員ら 31 人の死者を出して約 10 日間で原子炉を封じ込めたが、日本では事故

処理の手法も安全への考え方も違う。一方、原子炉 1 機の事故だったチェルノブイリと違って福島では 4 機でトラブルが起き、海洋汚染も加わった。原発事故の放射能汚染は同心円状に広がるのではなく風向など気象条件にも左右される。チェルノブイリでは原発から北東に 300 ㎞離れた地点まで高レベルの汚染が広がっていたことが判明している。日本も今後、原発周辺のさらにきめ細かい汚染調査に取り組まねばならない。チェルノブイリ周辺では今も住民の健康被害が報告されているが、ソ連末期の社会混乱など精神的ストレスの影響も指摘され、被爆との因果関係は証明できないと切り捨てられる例が多い。長期被爆がもたらすガンによる死者数も、推計した国際機関によって 4000 人から 1 万 6000 人まで幅がある。低線量被爆の影響評価が異なるためだ。

福島の放射物質もれも「ただちに健康への影響はない」とされているが、住民への長期にわたる健診と追跡調査を怠ってはなるまい。放射能への誤解が生む避難住民への差別、住み慣れたきょうからの退去を拒む人たち、原発閉鎖に伴う代替電源の確保や住民の再就職などは、いずれの事故にも共通する問題だ。周辺地域の汚染除去への取組みやナタネ栽培による土壌浄化の試みなど、事故後の対策でもチェルノブイリを参考にすべき事例は多い。日本で起きた「想定外」の事故は国際社会にも衝撃を与えた。チェルノブイリ事故から 25 年にあたって 19 日、ウクライナで開かれた首脳級の国際会議で、日本の高橋千秋副外相は、福島原発事故の早期収束と、検証結果などの情報公開を約束した。事故の教訓を国際社会と共有していくことで新たな国際貢献につなげるように望みたい。（2011/04/23 毎日新聞社説）

＜モスクワ川クルージング＞

地下鉄でアルバット通りにでて昼食をとり、その足でモスクワ川クルージングの発着所にむかった。片道というか 1 回券で、モスクワを見渡せる雀が丘まで乗船し、地下鉄でホテルに戻るつもりだった。ところが、1 回券の申し出に、1.3 倍ほどの手書きの料金を指差すばかり。何を言ってもロシア語と英語でどうにもならず、とうとう購入口を閉められてしまった。チケットを購入しているロシア人に手助けをお願いすると、1 種類のチケットのみの発売であるという。何か割り切れないまま乗船した。

モスクワ川は、蛇行しながらモスクワを貫流している。モスクワの地名はこの川に由来すると聞いた。客は 30 名そこそこで、その大半は学生のグループだった。一息ついた頃、川辺の岸が高くせり上がっているその奥に高層建物の上部、モスクワ大学とスキージャンプ台が見えてきた。

鮮やかな金色に輝く丸屋根の救世主キリスト聖堂が見えてきた。ナポレオン軍との戦いでの勝利を記念して建立されながらスターリンにより爆破され、ソ連崩壊後に再建されたというから、ソ連とロシアの激動と混迷を象徴する運命を背負った建物といえそうだ。そして、いよいよ赤い城壁の奥にクリーム色のクレムリンが姿を現した。色彩豊かなワシリイ大聖堂と続くが、クレムリンの引き立て役にも思えてくる。

船はスピードを落としたと思ったら、川幅一杯を使いＵターンし、何処の船着場に寄ることもなく引き換えした。チケットは往復の料金だった。

＜雀が丘とナポレオン＞

雀が丘の下にはモスクワ川が流れ、広大な運動公園になっていた。その中心が、1980 年モスクワオリンピック、ソ連のアフガニスタン侵攻に抗議し、アメリカを中心とする西側諸国がボイコットしたオリンピックのメーン会場ルジニキアリーナがあった。スポーツ大国として国家の威信をかけた選手養成の心臓部に相応しく、自然林を巧みに利用して整備されていた。

威容を誇るモスクワ大学

黄昏時は過ぎてしまい、夜の帳との競い合いながら「雀が丘」に登った。かつての「レーニンの丘」というよりも、ナポレオンのロシア遠征時、モスクワを遠望したと丘で知られる。裸電球のもとで、土産物の露店が忙しく店仕舞していた。展望台の塀にもたれてモスクワの夜景を見入った。

19 世紀初め、ナポレオンは軍人から皇帝になった。彼の勢いは止まるところ知らず、多くのヨーロッパの国々を支配した。そして、ロシアの征服を狙い戦争を起こした。ナポレオンはモスクワの西の端にある「ポクロンナヤの丘」から市内を見下ろし、つぶやいたといわれている。「この無数の教会を持つアジアの町、聖なるモスクワ。遂にそこにある」（レフ トルストイ「戦争と平和」）。

ナポレオンがこの丘に立ったのが 9 月中旬（1812）。当時のモスクワは人口約 30 万（‘19 1.7 億人）、大部分の市民がモスクワから脱出しており、原因不明の火事が起きて、多くの建物が焼けてしまった。ナポレオン軍は、当てにしていた食糧が手に入らず、疲れ切った兵士たち追い討ちをかけたのが、このモスクワの大火といわれるロシアの焦土化作戦だった。完全に行き場を失い、ロシアの寒さと飢えと疲労で退却せざるを得なかった。この戦いをロシアでは、「祖国戦争」として歴史に留めている。

ナポレオンが立った丘は、「レーニン丘」から「雀が丘」に名を変えている。ここから市内を眺めようとしても、高い建物に邪魔されてしまい、昔のような景色をみられないが、昔に思いを馳せることができた。展望台の背後には豪壮なスターリン クラシック様式のモスクワ大学がライトアップされて聳えていた。

＜ロシア最後の鉄道の旅＞

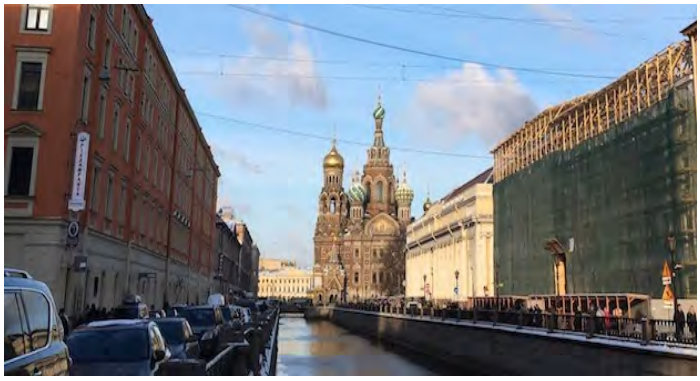
徒歩と地下鉄でモスクワレニングラード駅に向う。駅入口では空港で行われているような厳重な荷物チェックがあった。2 年前（2009）の 11 月末、特急列車爆破テロ以来始まったという。深夜だというのに構内は人で埋まっていた。

モスクワとサンクトペテルブルク間を走る特急寝台では、「赤い矢」号が有名だが、他にも数本の列車が走っている。われわれの乗る列車はそのうちの 1 本で、発車 30 分前には入線していた。これまでの列車と違い、ホームと車輌との間に大きな段差がなくなった。2 等寝台は、シベリア鉄道と同じ造りで、上段は既にベッドのセッテング済だった。20 分遅れで 0：10、滑るように動き出した。トイレはタンク式となり、臭いはなくなった。これまでの鉄の塊のような車輌から、軽快で明るい色彩に変わり、揺れも少なくなった。所要時間が 8 時間ほどだから、ホテル代が浮く位の感覚で眠りについた。

コンパートメント扉を叩く音で目を覚ました。到着 30 前、車掌のウェークアップコールだった。ペキンから数えると 7 泊 12 日の鉄道の旅は間もなく終る。眠くなれば横になり、お腹が空けば他の人に遠慮することもなく食べて、背筋を伸ばしたくなれば廊下に出て景色を眺め、隣のコンパートメントに顔を出しておしゃべりをする。暗くなれば日記を綴り、読みかけの本に目を通す。「何にもない 1 日」の時間の使い方にも余裕が出てきたということだろうか。ゆったりした生活ペースに慣れてしまうと、暇はこの上ない心地良いものとなっていた。それは、移動そのものが「旅」となって楽しみの対象となっていた証だろうか。サンクト ペテルブルグモスクワ駅着 8：30。

＜サンクト ペテルブルグ＞

モスクワから北西へ 650 ㎞。ロマノフ王朝ピョートル 1 世が、ヨーロッパからの外敵に備えるため 1703 年に造られ、ロシアで最も美しいといわれている街である。サンクト ペテルブルグは、何度も名称を変えた街で知られる。ピョートル大帝が建都した時は「サンクト ピーテルブルック」、聖なるペテロ＝ピョートルの市、その後、これをドイツ語風に読んで「サンクト ペテルブルグ」と改称している。ところが、「ブルグ」は、第 1 次世界大戦の敵国であるドイツの言葉という理由で、スラブ語の読み方「グラード」を組合せて「ペトログラード」になった。さらに 1924 年、ロシア革命の中心人物のレーニンに因んで「レニングラード」に変更された。その後、ソビエット連邦崩壊後の 1991 年、住民投票によってかつての「サンクト ペテルブルグ」に戻された。名称変遷は、激動の歴史の裏返でもある。これに生半可な知識では到底立ち向かえない。でも、素人特有の想像力を加味して自分なりに楽しむ手はありそうな気がする。とにもかくにも、この街はいろいろな歴史が溶け合った迫力に満ちている。これに身近に触れられることは、この街の大きな旅の魅力といえる。



運河沿いの街並み（奥が血の上の救世主教会）

午後、早速ローカルガイドの案内でオリエンテーションウォークが始まった。ホテルは、オストフスキー広場、アレクサンドリンスキー劇場の直ぐ近くだった。何処をどのように歩いたのか解からないが、寒空のもと、早足での 2 時間だった。ガイドの推奨するパイの美味しい

カフェで、チャイ、紅茶とロシア独特のキャベツパイで冷えた体を温めた。
　街建設に当たってアムステルダムをイメージしたともいわれ、いたるところに運河が張り巡らされており、市街地総面積の 10%が水面だと聞いた。改めて地図上でサンクトペテルブルグを見てみると、バルト海のフィンランド湾最東端に流れ込むネヴァ川の三角州に造られている。そして、ネヴァ川は河川や運河によって白海、ドニエプル川、ボルガ川と結ばれているため、カスピ海やボルガ川からバルト海への出口であり、国際航路の要衝の地でもある。街の中心はネヴァ川左岸の歴史地区で、ここをネフスキー大通りが東西に延びている。街中に 1000 以上の歴史的建造物があるといわれているだけに、サンクトペテルブルグを彩る建物の色合いと水とが溶け合い、落ち着いた雰囲気を醸しだしていた。大人の街のイメージで、ロシアの西端というよりヨーロッパの東端の感じであった。

＜ロシアの寿司＞
　モスクワの繁華街、アルバット通りにはロシアをはじめイタリアからトルコ、タイなどいろんな国のレストランが軒を連ねており、世界食べ歩きが可能であった。そんな中にあって、日本食がかなりのブームらしく、寿司店がそっちこっちにあった。サンタクロースと体型、年恰好ともにそっくりさんが、建物間の狭いところにマトリョーシカを並べていた。自分で作って販売しているのだといい、製品の良し悪し見分け方を話してくれた。斜め向かいの寿司店のことを尋ねると、入ったことがないが評判は悪くないとのことだった。眺める限りでは、結構繁盛している様子だった。外国の寿司への関心があったが、海辺の街サンクト ペテルブルグに持ち越すことにしてきた。
　サンクト ペテルブルグ最終日の夕方、家路を急ぐ人々で賑いだしたネフスキー大通りに夕食を求めて出てきた。その気になって見ていると、日本食レストラン、寿司バーが林立していた。店内は結構な客入りだった。造りも雰囲気も寿司屋というよりレストランで、みんな器用に箸を使い食べていた。日本で回転寿司専門の身には何か侘しい気もしたが、値段を優先させ巻き寿司をお願いした。外国でシャリに注文をつけるのは酷だが、ふっくらと飯粒が立ったものは望むべくもなかったが結構美味しく食べられた。値段はロシア料理とさほど変らなかった。茶は有料で、ジャスミン茶はでかい土瓶で出てきた。寿司とほぼ同じ値段で、結果的には地元料理の２倍の料金になった。

＜エルミタージュ美術館＞
　エルミタージュ美術館と凱旋門の間に、モスクワまで侵攻してきたナポレオン軍を追い返したことを記念して建てられたというアレクサンドルの円柱が空高く建っていた。
　エルミタージュ美術館は、ロマノフ王朝の冬の宮殿だった建物を中心に、5 つの建物からなる巨大な建造物である。内部はまさに豪華絢爛、想像の域を完全に超えており、建物自体が美術品の感があった。所蔵品は 300 万点を越えるといわれ、館内の 400 を数える展示室を見て回る距離は 22㎞にもなるという。当然、展示品は多岐にわたっており、作品の時代背景には到底ついていけなかった。近代ヨーロッパ絵画のセクションでは、ゴッホ、ゴーギャン、セザンヌ、ルノアール、モネ、ピカソなどの作品が惜しげもなく並んでいた。美術館って、こんなに疲れるところだったのだろうかと自問自答してしまった。館内のカフェテリアと記念品売店で長時間の休憩を取った。

＜ロシア出国＞

北京発モンゴル経由シベリア鉄道の旅、INTREPID Travel のツァー Trans-Mongolian Express は、北京集合、サンクトペテルブルグ解散であった。旅の終わりは、エストニア、フィンランド１人旅の始まりでもあった。一昨日、ネットで購入した国際バス、エストニア タリン行きのチケットを握り締め、バスターミナルに向かった。

９：00 発車。高速道路は快適だったが、国境が近づくにつれて凸凹の簡易舗装になった。11：05 ロシアとエストニア国境着。全員、全ての荷物を持ってバスを降り、イミグレーションに向かう。荷物検査は型通りで特別なことはなかったが、バスは荷物室から車体の下まで入念にチェックが行われていた。ロシア出国手続きを終えて、これまでにない開放感というか安堵感を覚えた。入国時の出入国カードは通し番号が記されており、書き損じは許されなかった。加えて、滞在ホテルで受け取る滞在登録なるものがあり、出国まで保管してきた。さらに、パスポートの携帯が義務付けられているなどなど、何となく気が重いことが多かった。無国籍地帯をバスで移動し入国審査へ。こちらは下車することもなく、パスポートを集めて、スタンプを押すだけだった。出入国手続きに費やした時間は１時間だった。

エストニアの第１印象は、緯度的なものもあるのだろうが、明るく、穏やかな感じだ。原生林に囲まれシベリアと違い、民家は屋敷森の中に建っていた。その周囲は区画された耕作地、牧草地、放牧地であった。14：40、タリンのバスターミナルに入った。